



青の深淵と 天空の回廊

高知県吾川郡いの町

みこぶち
かつては「巫女淵」と呼ばれていたがそれが訛って伝わり
「にこ淵」という呼び名に変化したという説も。

高知県の中央部に位置するいの町。ここには、一瞬で心を奪われる二つの「青」がある。一つは、原生林の底で宝石のように輝く「仁淀ブルー」の象徴、にこ淵。もう一つは、標高一七〇〇メートル近い稜線を駆け抜ける「スカイラインの青」、UFOラインだ。水神の伝説が息づく谷から、雲を眼下に見下ろす天空の道へ。自然と人の営みが織りなす、いの町の絶景を巡った。

国道一九四号線から枝分かれし、緑深い山あいをしばらく進む。やがて、谷の気配が静かに濃さを増し、その奥へと導かれていく。にこ淵は古来、地元の人々の間で水神の化身である大蛇が棲むと語り継がれてきた神聖な場所であった。数年前までは、急峻な崖をロープとはしごを頼りに下りなければ辿り着けなかったが、二〇二五年に大規模なリニューアルが実施され、整備されたならかな遊歩道やスロープにより、現在は誰もがその神秘に触れられる環境が整えられた。それでも一歩足を踏み入れれば、肌を刺す冷気と厳かな静寂が、ここが本来もつ自然の厳しさを今も静かに物語っている。滝壺周辺の岩場は非常に滑りやすいため、スニーカーなど動きやすい靴での訪問

が不可欠だ。

滝壺を満たす水は、条件が整えば、太陽光の差し込む時間帯に深いコバルトブルーから鮮やかなエメラルドグリーンへと表情を変える。透明度の高さゆえに底まで見通せそうでありながら、その色の深さはどこまでも吸い込まれそうな感覚をもたらす。この神秘的な青は、いくつもの要因が重なって生まれるという。

仁淀川は、水質日本一に選ばれたこともある清流で、不純物やプランクトンが少ない。太陽の光が水中に深く差し込んだとき、水分子は波長の長い赤色を吸収し、波長の短い青い光だけを乱反射させる。「レイリー散乱」と呼ばれるこの光の魔法が、一点の濁りもない水の中で純度を増し、私たちの瞳にあの鮮烈な色を届ける。さらに、川底に横たわる「緑色片岩」という青みを帯びた岩石が、天然の反射板となつてその色彩を支えている。光の科学と太古の地質が融け合ったとき、自らが内側から発光しているかのような、「仁淀ブルー」が現れるのだ。

その美しさは自然の恵みであると同時に、地域の人々による苦渋の決断と献身的な環境保全によって支えられている。かつては知る人ぞ知る「秘境」であった。



UFOライン
※UFOラインは、冬季閉鎖
(通常11月下旬～4月中旬)があるため、
最新の交通情報をご確認ください。

仁淀川は透明度が高く、
カヌー、ラフティング、アユ釣り、
川遊びなどが楽しめる。

「名越屋沈下橋」は、仁淀川に架かる
最下流かつ最長(全長191m)の沈下橋。

お立ち寄りスポット

道の駅
土佐和紙工芸村
くらうど

清流・仁淀川のほとりに位置する体験型の道の駅。レストランや産直市、入浴施設、宿泊棟を備え、旅の休憩と滞在の両方に対応する。土佐和紙の紙すき体験やカヌーなどのリバーアクティビティも充実し、自然と地域文化、食の魅力を一体で味わえる拠点。

住所／高知県吾川郡いの町鹿敷1226 TEL 088-892-1001
営業時間／9:00 ～ 21:00 ※各施設によって営業時間が異なります。 定休日／水曜日

おみやげ紹介

ミレー
ビスケット

ひのき
ウォーター

小夏羊羹

にこ淵コーヒー

トマト

芋けんぴ

とさてぬぐい

土佐和紙のカード

ゆずの
贅沢
ドレッシング

緑茶ブレンドティ

鰹茶漬け

西条市

東赤石山

瓶ヶ森

石鎚山

にこ淵

UFOライン

道の駅 土佐和紙工芸村
くらうど

高知市

仁淀川

名越屋沈下橋

いの町33号線交差点

国道11号線交差点

KOCHI

waku
waku
spot

UFOライン入り口看板

にこ淵駐車場の状況がわかる
電光掲示板で、混み具合の確認を。

かつて使われていたハシゴが
今もにこ淵遊歩道のそばに
残っている。

整備された、にこ淵遊歩道の途中には
スロープで行けるバリアフリーな展望台もある。

この地も、今では多い日で一日二〇〇〇人以上が訪れる高知を代表する聖地となり、深刻な渋滞やマナー違反といったオーバーツーリズムの課題に直面してきた。急増する観光客による混乱の中でも、地元有志たちは「観光客を信じて、この聖域を開こう」と決断し、現在も徹底した清掃活動や連休中の大型バス規制といった対策を続けている。にこ淵の美しさは、単なる自然の造形ではなく、人の手によって守り抜かれた輝きなのだ。この奇跡のような青を次世代へ繋ぐため、訪れる私たちにも、その想いにマナーという敬意で応える責任がある。

さらに標高を上げ、「天空の道」を目指す。町道瓶ヶ森線、通称「UFOライン」。いの町から愛媛県側へと連なるこの道は、かつて林業のために使われていた作業道を基に整備されたもので、現在では石鎚山系の雄大な景観を望むドライブコースとして知られている。標高一三〇〇メートルから一七〇〇メートル付近を走る約二七キロの回廊。車窓を開けば、山肌を渡る冷涼な風が流れ込み、視界いっぱいには笹原の稜線と広大な空が広がる。時折、雲が道を横切り、まるで空の中を走っているかのような浮遊感に包まれる。この道がかつて、山の恵みを運ぶための実用の道であったことを思えば、

いま私たちがこの景色を気軽に堪能できることの贅沢さを噛み締めずにはいられない。

山を下り、町の中心部へ戻る。仁淀川本流は、にこ淵の鮮烈な青とは対照的に、淡いブルーを湛えながらゆつたりと土佐湾へ向かって流れていく。その風景を象徴するのが「沈下橋」である。

町内にある名越屋沈下橋は、増水時に水に沈むことを前提に設計され、欄干を持たない。自然に抗うのではなく、ありのままを受け流す——その姿は、この町の人々のしなやかな生き方そのもののようにも見える。橋の上から川面を覗き込めば、空の青と山の緑が優しく溶け合い、穏やかな日常の中にある仁淀の色が広がっていた。

にこ淵の静寂と、UFOラインの風、そして川面に揺れる穏やかな青。それぞれ異なる表情を持ちながら、この町の「青」はひとつの連なりとして心に残る。畏れとともに語り継がれてきた自然を、いま私たちは間近に感じることができる。その風景の奥には、変わらぬ自然の力と、それを守り続けてきた人の営みが静かに息づいている。いの町の青は、ただ美しいだけではない。訪れる者に、自然とどう向き合うべきかを問いかけながら、今日も変わらずそこに在り続けている。

